
アルフォンス・マクベルの受難

伊吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルフォンス・マクベルの受難

【Nコード】

N4309V

【作者名】

伊吹

【あらすじ】

どっかのお偉いさんのお嬢さまに出逢ってしまったばかりに振り回されつつも、なんだかんだでオイシイ思いをしちゃってる兵士のお話。見切り発車の自転車走行。頭空っぽにして読めるお話です。

一瞬にして視界が赤に染まった。それが何を意味するのか悲しいほどにわかってしまう。意識を保てなくなった俺は、目を閉じてそのまま意識を手放した。

長年にわたり戦場を潜り抜けてきた俺にとって、意識を手放すことは初めてであり、最期であると、頭にかすめた。

「……………っ！」

「うおいっ！」

冷水を顔に浴び、大きな声で叫ばれば、沈みきっていた意識も強制的に浮上させられる。顔を振って水気を飛ばし、星空を映す夜空を背景にのぞきこまれた端正な顔をその目に移し、自分の置かれた状況を振り返る。

そして意識を手放すその直前までの記憶が一気に戻り、俺は慌てて両下肢で地面を蹴り、腕の力だけでその場でくるとまわる。

思いのほか下肢に力が入らず、うまく着地はできなかったが、振り上げた足に驚いて数歩後ろに下がった見知らぬ人と距離をとることができた。

ただ唯一の誤算は、腰に下げたナイフを抜き去ろうとしても見当たらないことだった。

「チッ」

体術はあまりすきじゃねえのに。

先手必勝、とばかりに地を蹴り1歩でその距離を詰める。上体を沈め、懐に入り込む。そこで違和感を感じたけれど、勢いがついた身体を急に止めることはできない。

——おいおい、素人かよ。

一応の防御の姿勢をとってはいるが、体術に関しては手加減ができない俺の一撃を緩和することなどはほぼ不可能に近い。
俺の予想通り、きゃ、と声を上げて吹き飛ばされる。

——— きゃ？

思わぬ叫び声に俺は一瞬考える。

「オンナ……？」

男では出せないであろう、高く細い声にさっと血の気が引く。

「おい、大丈夫か」

吹き飛ばされたまま、ピクリとも動かない。思わず駆け寄ってみると、少し土に汚れてはいるが、きれいな金色の髪がゆるく背中できとまとめにされているのがわかる。

「ぜつたい、どつかのお偉いさんだー」

右手を額に当てて天を仰ぐ。がつくし、と思わずうなだれてしまう。やってしまったものはしょうがない。これからどうするか、が問題だ。よくよく見るとこのオンナの着ている制服、緑を基調にして右肩から袖先まで黒のラインが3本。

——— よりにもよって敵さんかよ。

ぐだぐだとネガティブ思考に捉われつつも、手は彼女の口元へあて呼吸を、そしてそのまま頸部に2本指を当て、脈が触れるのをしっかりと確認する。

どうすっかな、とコンマ1秒ほど悩んで、その答えは当然のごとく彼の頭に浮かんだ。

——— もちろん、これは人助けだし。何を言われても、そう言い通す！ てことで、ありがたく拝見しますか。

俺は嬉々として奴さんの詰襟を緩めた。

1（後書き）

だいたいこのくらいの長さを目安にやってみます。

かるーい感じで、進みます。R15は、あんな感じなのでつけときます。

よければ、どうぞ。

そろもう、ごちそうさまでした。

十分に堪能させてもらって、満足した俺は現状把握に努めることにした。

辺りを見渡して見えるものは樹木ばかり、水音が聞こえているため川が近くに流れているのだろう。さっきまでは気にもしなかったが、水をかけられて起こされた割には、俺も目の前の女も全身ずぶ濡れである。

——川に流されてきたのか？

周囲のにおいを嗅ぐが、戦場特有の血生臭いにおいはしない。水と腐葉土の匂い。

——水で完全に匂いが消されたな。戦場より風上で、下流に流されたってどこか。

そうだとすると、木々のなかでちょうどぼっかりと星空が見えるこの場所に俺を運んだのはなぜだ。

味方しかない土地で、ここに野営するのは助かる可能性があるとして、どの立場にいる人間に見つかるのかわからないこの場所で開けた空間にいるのはまずい。たださえ風上にいて、匂いが遠くまで届くの。

——やっぱ実戦知らずのお姫様ってどこか。

深いため息を一つ。俺は身震いして全身の水気を飛ばす。どこか隠れる場所を探すため、いまだ目の覚めない彼女を抱え、足跡を巧妙に隠しつつ森の奥へを進んだ。

敵とは言え、これほどまで手厚く扱うのはもちろん相応の見返りを求めているからに決まっている。

目を覚ましたら何を求めてやろうかなあ、なんてきつとしまりのない顔して歩く。そろもう、ここまでの道のりを思えば降ってわいた

幸運にすぎりつきたくもなる。

—— いや、違うか。すぎりつくのは、このお嬢さまのほうですけど。

あはは、あとでしっかりすっきり丸ごといただいちゃいますから。

お子様には見せられないピンク色の頭の中におもわずにやにや。

それを助長させるかのように腕の中のお嬢さまは小さくのを鳴らすように声を上げた。

—— ずいぶんと煽ってくれるじゃないか。さあて、今夜の寢床はどこだー。長く、つらい——それもう、下が。思い出したくもない禁欲生活の解禁が目前に迫ってる。

2（後書き）

ちよい短め。

まだまだ続く！

思い返したくもないが、思い返してみる。

ちよつとばかり腕に覚えがある俺は、傭兵として生計を立てている。護衛や化け物退治はもちろん。どっかでキナ臭い話を聞けば金儲けとばかりに人を斬る。

いくつかの名だたる戦に顔を出しては、戻って花街を根城にすれば、まあまあ名の知れた傭兵のできあがり。

ヨイシヨヨイシヨしてくれる妓女たちは心身ともに、イイ思いをさせてくれる。そんなこんなで、ちよろいもんよと今回の戦に顔を出してしまつたのが俺の運のツキ。

金と女がもらえるのでなければ、こんな辺鄙なところまで来なかつた。

藁人形を一刀両断するだけで軍位をもらえることに内心首を傾げながらも、根無し草生活の長い俺はそんな生活も悪くないと思つてしまつた。

今、思えばなぜそこで納得するんだ、過去の俺。

ハナが利くことで有名なこの俺が、敬称を付けられたぐらいで浮かれてしまつた、とは思いたくもない。

ああ、傭兵稼業は人のツテと腕だけが頼りなのに、後ろ指刺されたら俺、やってけない。

戦の火蓋が切つて落とされれば、圧倒的な国力の差。どう考えてもこれは。

「完全負け戦じゃねえか」

そりゃ、腕の立つ傭兵に軍位を与えたくもなる。

傭兵というものは結構シビアだ。負け戦に参加して命など落とした

くない。あつてこそその命だ。名誉や金よりも命。俺だつて、わかつてはいたんだけど。

—— ああ、俺つてばか。

落ち込んで落ち込んで、落ちるとこまで行き着いて。とるべき道はひとつ。

「さつさとずらかるに限る」

斬つて斬つて、ひたすら斬つて。負け戦の中に一筋見えた俺の快進撃にお偉いさんが目を付けたのか知らんが、押し寄せる大群にまぎれて俺は逃げ出す。

あ、この時点で俺は敵も味方もなく、うっぶん晴らしに斬つてましたから。

いい具合に夜の帳が下りてきて、逃げ切ったと確信したその一瞬の隙に俺の視界は赤に染まったのだ。

3（後書き）

絡みが遠いな。

そつえば、不意打ちのように斬られたのだつたと思ひ至る。しかし、どうみても身体に異常はない。あるとすれば意識が遠のいて倒れたためにできたであろう打ち身ぐらいなもんだ。

となれば、あの赤は。

抱き上げた細身の身体を見下ろす。

——これしかないよなあ。

意識のない身体は重力に逆らわず重みを俺の腕に伝える。

お姫さまの腕は彼女の腹部へ、頭は俺の肩へと寄せている。ただひとつ下へと垂れるソレを視界に入れた。

——奴さんもか。

真紅の翼は力無く、微かに地面をすっている。見事な羽を傷物にするのは忍びないが、なにせ今までに拝んだことのないほどの大翼である。広げたらきつと俺一人くらいなんなく包み込めるだろう。水を吸って重くなったそれを俺が器用に畳み込めるわけもない。仕方なく引きずるしかなかった。

目の前に急に現れた真紅の翼に、川に流されたであろうずぶ濡れの身体、この状況に至る過程を推測することはたやすいが、推測の域をでない。

——なにはともあれ、このお嬢さまが目を覚ましてからか。

ゆっくりを歩を進め、横になって身体を休める場所を探す。お礼もたんまりと頂ける場所にしなくては。

「どこかクマの寢床とかねえかなあ」

くんくんと鼻を利かせる。獣臭を微かに認め、進む方角を修正する。夜も更け、辺りにちらほらと光る目が俺らを見つめる。堂々と縄張りを横断するやからを見に来て、隙を窺っているに違いない。

しかし、そこはまあまあ名の売れた傭兵である俺。獣なんぞに引けをとらない。

ひと睨みで尻尾巻いて逃げ出したわ。

俺の交尾に邪魔するなつてな。ああ、今からあれやこれやが楽しみすぎる。

またもやピンク色の妄想に浸っていたら、後ろから数匹の獣の気配。全速力でその差を埋めにくる。

「チツ、血の気のある若い衆かあ？」

先程追いやった群れの一員だと悟り、その隠そうともしない怒りや殺気に俺は腕の中のお嬢さまを木の幹に寄り掛かるように降ろす。これで額に口づけでもすりゃ、格好付くかも？ そんな考えに捕われる間にそれは姿を表した。

するどい牙を剥き出しに、唾液を垂らしながら俺との距離をとる。

—— ひいふうみい、て数えんの面倒だな。

ガルル、とその敵意をあらわに俺を歯向かおうとするその無謀さに笑った。

「面倒だ、一匹ずつじゃなくまとめてこいよ」

彼らに俺の言葉が通じることには知っている。

その言葉を合図に狼は飛び掛かる。

結果？ そんなもの聞かずとも。

弱肉強食の世界、俺は一瞬にしてその頂点の上り詰めた。

——だからこそ、この洞穴に快適に2人肌を寄せて暖めあつて
るんだけどね。

4（後書き）

まだ起きない。
洞穴についたし、次こそはツツ

きゃん、と可哀相なくらい尻尾を後ろ脚の間に垂らして腰が引ける狼どもにやりすぎたか、と一瞬後悔する。ノビてしまった数匹に残りの連中は意欲を削がれたようだ。

纏った殺気をさつと消す。いくばくかの恐怖を残しながらも、俺に従順の姿勢をみせた。

「よせよせ、群れの長なんぞならんぞ。それよか身体を休めたいんだ、どこか洞穴かなんかに案内してくれ」

くうん、と俺の垂らした左手に鼻を擦り寄せ甘える仕草に笑う。さつきまで敵意丸だしだったくせに。無意識に、鼻の頭を掻いてさあ、と促す。

近寄ってきた一匹が俺の軍服の裾を噛み引つ張る。案内してくれるらしい。

いまのいままで起きる気配もないお嬢さまをもう一度抱き上げる。振り向き、距離が開けば立ち止まる若く甘え上手な狼を追う。

「悪かったな、死んではいない。ノビてるだけだ、半刻もすれば目を覚ますだろ」

そうして案内された洞穴は申し分なく。奥行きはかなりあるようだか、そこまで行かなければいい。

助かった、と案内狼——人ではないし。に最後の頼み事と礼を言う。さあて、奴さんとムフフな時間、だがずぶ濡れな上にずいぶんと夜風に吹かれていた。意識のないヤワなお嬢さまには相当堪えたらしい。

浅い息を繰り返し、身体を震わせている。典型的な風邪の初期症状。額に手を置いてみるがさほど高くない。

こりゃ、熱が上がりきるまで身体を暖めてやらねば。

だがその前に、入口から大きな葉と乾いた小枝を多量に運び入れた狼が見えた。俺の理想通りのそれらに満足する。葉を数枚重ねたその上にお嬢さまをゆったりと横たえる。

手が自由になり、ぐるぐると回してこわばりをほぐす。

もう帰れ、と狼たちに告げ俺は枝を束ねてその上で指をならした。小さな火種が枝に移り徐々に広がる。

寢床も火も確保した。

そしたら次はお楽しみの時間でしょう。

何故か好かれてしまった子分どもが洞穴の入口に待機している気配がする。

俺は濡れた軍服を脱いで、火元からやや離して広げて置いた。下着一枚ではあるが、これもそのうち必要なくなる。

そして意識のないお嬢さまへと取り掛かる。

先程十分堪能させてもらった膨らみをあらわにさせて全て取り払う。

—— 本当、ご立派。

いそいそと下へと移り、あっという間に俺と同じ姿に。

男としてここは食べねば一生の恥。

ぴとりと肌を合わせて、俺は視界が歪むのを感じた。

げっ、これは口ウの木かよ。

煙に催眠効果のある枝をどうやら燃やしてしまったらしい。

すでに戦闘準備万端なのに、と最後の意地で彼女へのしかかるのを

諦め、横になり、その谷間へ顔を埋め、
またも意識を手放した。

5（後書き）

まだまだ絡まない
早く目を覚まさないと言われちゃっぞ。

けたたましい叫び声で俺は一気に覚醒へと呼び覚まされる。そして衝撃が身体に走り、ごろりと転がる。

「てえ、なんだよ!」

あれ、デジャヴユか?と思うほど俺はまた腰を落としていつでも飛び掛かれる体勢へ移る。

そこで目に入ったのは、真っ赤な翼で自身の身体を包み込み、プルプル震えるお姫さま。

そしてねむりに付くまでの状況を思い出す。

——俺、パンツ一丁だし。格好つかねえ。

視線を強く感じ、彼女と目を合わす。うるうると涙を微かに浮かべていながらも強気なその目付きに一気に気が抜ける。

外はもう明るく、陽が高いことがかわれる。

ロウの木の煙にやられるとは、俺も相当疲れてたみたいだ。思わず

苦笑い。

「何がおかしいのです!」

怒鳴られ、俺は彼女を見る。

翼に隠れた肢体が頭によぎって、頭を振った。

「着替えなお嬢さん、話はあと」

顎でしゃくってパリパリに乾いている軍服を示す。ぐっと腕を腕に伸ばしコリを解す。

傭兵だというのに軍隊での生活、寝台のある生活に毒されてしまっている。

怯えている人間を無理矢理どうこうするほど鬼畜ではないにしろ、目の前のセミヌードショーに背を向けるほど愚かでもない。俺に背を向け、翼を大きく開いて隠すようにその敵さんの軍服を着込んで

いく。

つまらない。

俺も下だけ着て、お嬢さまが振り向くのを待った。

「あの、ここは……」

「さあな？川を流されたいらしい、戦場からだいぶ離れたようだ臭いも届かない」

俺の言葉と仕種に頷く。

どこまで踏み込むかな、と考えながらひとつひとつ言葉を発する。

お嬢さまの言葉遣いから当初の予想は間違っていないらしい。どこかのお偉いさん。さて、敵さんであることに変わりはない。

この目の前のか弱いお嬢さまを盾に金をとってもいいが、それからとてもまずいことになりそうだ。

さて、どうするかな。

「その、制服……」

「ああ、どうやらお互いの立場は違うらしいな」
俺は傭兵だし、立場などコロコロかわるけどな。
なるようになれ、と続けた。

ああ、腹減ったー。

足を投げ出し、手を後ろについて反応をみる。

そして思わぬ返事に俺は顎が外れるかと思った。

「あのっ！私を守ってくださいませんかッ」

6（後書き）

ついにッ

いつまで隔日投稿ができるかなあ

驚いたのは変わりないが、俺の脳みそは直ぐさま回転し始める。

「なぜ」

「国へ帰るため」

その答えに俺は片眉を上げた。

「お嬢さん、あんたの国はグランドールじゃないのか」

軍服を指すように、言葉を投げ付ける。答えはわかりきっている。では、どこ。

唇を噛み締め、なにかに耐えるように。沈黙が続く。俺は頭の方から足の先まで彼女を鑑賞することにした。

金色の髪は薄汚れてはいるが、いつも手入れされているようで傷みも少ない。背中を越え細く括れた腰の辺りまで伸ばされ、ゆるく結わいている。ストレートではなくゆったりと広がる猫っ毛のようだ。美の女神に祝福されているに違いない美人、見た目17〜8歳か。ぷつくりと赤く腫れた唇は柔らかそうで、紅を引かずとも頬はうっすらピンク色。化粧気はないが毎日手入れされていたであろう肌はキメ細かく、弾力がある。これは実体験済み。

肩幅はどの妓女よりも華奢で、胸は立派なものをもっている。アレはようございました。括れた腰に小振りな尻もきゅと引き締まっていて、揉みしだくのが楽しみである。

身の丈は俺と頭一つは違う。まさに、深窓のお姫様そのものだ。軍服なんぞ着ずにドレスでも着て、ダンスやら刺繍やら、しておけばいいものを。

しかし、背中から生えた翼がそうもいかぬだろう。大国ならばいざ知らず、こんな辺鄙な土地に獣人という認識は低いに違いない。それならば尚のこと屋敷へ閉じ込めるか捨ておくかすればいい。

まあ、お嬢さまの身の上話には興味がない。俺はこのあとこのお嬢

さまを食べるのが最重要問題である。視覚と触覚だけで楽しんだが、俺は全身を使って気持ち良くなりたいんだ！

鼻息が荒くなってきたところで俺に声をかけてきたお嬢さまに意識を戻した。

この声で喘がせたい。——とお、危ない危ない。狼の一面を見せずに気持ち良く同意を得ねば。

過去の俺の行動なんか棚に上げ、息巻く。

「護衛を。謝礼は貴方が望むだけ与えます」

何も知らない子羊ちゃんは狼の懷に飛び込んできましたとさ。

7（後書き）

もっと軽い感じにしたいのに。

そんな安易に言っちゃっていいの？ それならもう言っちゃう？

「伊っちゃうよ？ ムフフな想像を脳内繰り広げているその前でいろいろ言葉を連ねているのを見て耳を傾ける。」

まあまあ、耳を傾けずとも俺の良く働く耳は無意識下で音を拾っているんだけども。

「私を国まで無事に送り届けることを条件とします。貴方……いえ、なにもありません」

そのほかにももろもろ条件とやらを並び立てていたが記憶にない。断られるかもしれない、という不安からか涙目になっているような最後の俺に対する呼び掛けは不自然に切れたもののそれ以上口を開かず俺の返事を待っているようだ。

「無事についてののはなんだ？ お嬢さん狙われてんのか、それとも単なる旅路のことを指してんのか？ 言っちゃ悪いが俺は今丸腰だ、お嬢さんの護衛を引き受けるにも心許ない。さて、あんたはどうしてくれる？」

言葉悪いが、どうせなら俺の得物も出せと暗に言ってみる。てか私の国ってどこだよ。

先程から一転、真っ直ぐ俺を見つめていたのに、困ったように視線をさ迷わせる。

——隠し事ばかりで護衛を雇おうと思うな。

「ここには、ないのですよね。実は森の中、貴方を起こそうとした場所に」

「あ？ ……。ええー」

おいおい、あそこまで戻らないかんのかい。確かにお嬢さんに気を取られてたのは認めるが、愛刀さえ見付けられないとは。

うなだれる俺を見てお嬢さんは慌てたように、もちろん新しいのも
ぜひ揃えて下さい、と。そりゃもう有り難くお言葉に甘えますから。

「とりあえず、俺の愛刀とってくる。話はそれから」

私も、と言い出しそうな仕種に先手を打って子分どもを舌打ちで呼
び見張らせる。その横を俺はひゆるりと身を滑らせるよう通り抜け
る。一刻も早く、と身体が軽くなる。木々の間を四本足で駆け抜け
る。ヒト型よりも速いため俺は獣型を好む。傭兵稼業には不向きで
あるから、ヒト型を基盤に生活してはいるが。

あつという間に開けた空間に舞い戻り八手を利かせる。俺の匂いが
染み込んだそれと小型の懐刀をみつける。口にくわえて元来た道を
舞い戻る。

飛び掛かるように洞穴に突っ込み、驚くお嬢さま。

「貴方、……獣型もとれるの？」

おろ？ そっち？

8（後書き）

お次は趣味まるだしの設定をたらたら

考えたくもないけれど考えてみる。

どっかで聞いた言葉を繰り返してみる。

この大陸には誰もが知るおとぎ話がある。こういう話は俺には似合わない、端的に言わせてもらうが、この世界には人間とそうでないものが存在している。勇敢な青年が仲間とともに人間とそうでないものを区別する基礎を作ったという話だ。しかしこれがおとぎ話で済ますことはできないのだ。これが事実であることは物心のついた子どもでさえも知っていることである。

それを裏付けるように、一昔前まではかつちり生存区域が分かれていた。なぜかはわからないが人間の住む地域にそうでないものが姿を見せることはなかった。

それを守るといわれている結界とやらをどっかの人たちが崩してしまつたらしい。らしいというのは俺ら庶民や流れ者には正確な情報は入ってこない。人伝てに聞いただけである。といっても噂というものとは案外的を得ていることも多いからあながちウソではないだろう。余談であるが傭兵稼業がさかんになって俺の名声も上がってきたのもこのおかげである。

人間とそうでないもの。

分かり合えるはずもないそれらが同じ場所に生存したらどうなるか。一方的な殺戮だって起きる。数で勝る人間が優位性を信じ身勝手な行動に移ったとしてもなんの不思議もない。あるいは本能のまま血に飢え、肉に飢え、圧倒的な個々の能力の差を持って襲いかかるかもしれない。

いまだから言えるのだが、そうでないものには知性を持つものがい

る。人間では比較対象とならないその知識は一部のものに与えられている。

そうでないものは人間とは姿かたちが似ても似つかぬものもいれば、人間と見間違うほどのものさえいる。そしてそれらは知性を含む身体能力が高ければ高いほどヒト型を取るのだ。

結界が消えたということはヒト型をとったそうでないものを認識するのは人間には難しい。それこそ俺のようなものでなければ。

9（後書き）

長くなり過ぎました。
もう1話くらい続きそうです。

俺のような、と簡単に言ってみたけれど。

それを説明する前にちよつとばかり、寄り道していく必要がある。

結界がなくなり、生存区域が曖昧となりどちらへも行き来ができるようになると完全なるヒト型をとったそうでないものは人間の生活に溶け込んでいく。なにをもってそうしたのは分かりはしない。逆に人間がそうでないものの地域へと移住することはほとんどみられなかったという。当然のことだろう、人間は数による自分の優位性を信じているのだ。自分が少数派となる場所へ好んでいくはずもない。そうでないものは弱肉強食の世界を生きている。各々の能力は高く、人間など相手にならない。自分が少数派となったとしても生きていける自信があるのだろう。完全なるヒト型と人間の区別がつかないのであれば、隣人がそうでないものだった、とはあり得る話だ。

そして神さまのいたずらとでもいうのか、人間とそうでないものの生殖行動は同じであつたがゆえ、——俺とお嬢さんみたいなものが産まれた。

どこの時代の人間もそうでないものもやることは一緒とは、世の心理ってか。

お嬢さんはいわゆる鳥型のそうでないものの血を引いているのだろう。翼人と呼ばれるその姿へお嬢さんはなり、いまここにいます。頭や足が鳥の姿を取る姿もあるため、お嬢さんは運がいい。人間は見ただ目で違つというだけで排除されてしまうからな、たとえ翼があつても、頭が鳥よりはマシだろう。

俺はというとふわっふわの毛に覆われた獣。おそらく狼かなにかの四本足歩行、完全なヒト型と獣型、その中間型の3つの姿を持つ。

中間型とは見た目はヒトであるのに獣耳と長い尻尾を持つ。異なる姿をとれる俺は、きつと親が上位のものだったに違いない。見事にそうでないものの血を受け継いだが、その能力を俺のものにしたのは俺の努力のたまものだ。俺の場合ヒト型をとっているときは人間以上の身体能力を持ち、知性やら理性やらは保たれる。完全なる獣型になればヒト型をとっているとき以上の身体能力を持つ代わりに理性は劣り、本能のまま行動してしまう。発情対象も限定されているのでつまらないことこの上ないけれど。

口にくわえた愛刀と懐刀を放り出して俺はヒト型へと戻った。

10 (後書き)

長くなりましたが説明終わり！

ふわっふわの獣耳と尻尾たまんないッ！

次にようやく名前がでてくる、かな……？

驚いたお嬢さんに俺は首を傾げる。俺がハーフだってこと何故に知ってるんだ。地面に落とした愛刀を腰に差し、柄に肘を置いた。懐刀は鞘を掴んで回転をかけて上へと投げて捕まえる。それを何度か繰り返し、沈黙を破った。

「混血ってよくわかったな？」

手を止めて軽く告げる。もしかしたらお嬢さんは俺以上の能力を持つかもしれない。油断大敵。

「最初にお姿拝見したとき可愛いらしいお耳と尻尾がありましたから」

あちゃ、どうやら意識を飛ばしていた間無意識に中間型になってたらしい。そりゃ、わかるはずだ。一人頭の中で自己完結している間もお嬢さんはぺらぺらと言葉が途切れることがない。——俺以上の能力はない、か？ 普通の貴族のお嬢さまか？
ワンちゃんみたいで可愛いらしいですわ、と。

——勘違いしてもらっちゃあ困る。中身はがつつり肉食系ですから。

ふさふさの毛に獣耳と尻尾だけで愛玩動物に決められちゃまずいと横槍を入れることにする。

「それじゃあ、詳しい話を聞かせてもらおうか」

請けるか請けないかはわからないがな。心の中でそう付け加えておく。手元で刀を遊びつつどうぞ、と促す。一瞬だけ話しづらそうにお嬢さんは身じろぎするが、決意したのだろう。不安げな表情から一転、きりりと引き締めた。

「お察しの通り、私はこの軍服に誇りは持ち合わせておりません。身も心もすべてとある国王へ捧げています」

貴族のお嬢さまがどこぞの騎士のような物言いだ。それが至極真面目に話すもんだから茶化することなんてできそうもない。やだやだ、

俺はお堅いのキライなのに。

「で、何のためにそれ着てここに？」

「国のためです」

それはわかる。自国の国王に忠誠を誓っているのであればそのすべての言動が国の為なんだろう。詳しく話せと言ってたんだ。これじゃ、ラチがあかねえ。

「護衛がいたんじゃないのか」

まあ、他国の軍服を着ている時点である程度情報はわかる。偵察、もしくは内部工作。このお嬢さまはえらく目立つ。隠密行動には不向きだろうに、なんちゅー人選だ。いや、あれか？ 女としてか？ いやいや、それにしてはあまりにも無知すぎる。それこそ身も心も潔白そうな人間だ。おおかた、国の為！ と言いつつ数人の護衛だけ連れて勝手にでてきたんだろう。あーやだよだ。まあ、謝礼でたんまりと満足感を得るためにも引き受けるつもりではあるがそれまでの苦労が多いとなると考えもんだなあ。

——ぶつちやけ、ここで食っておやすみ中にとんずらでもいいんじゃない？

11 (後書き)

じれったいくらいに動き出さないよねえ……

「護衛は先の戦ではぐれてしまいました」

自分の一言に打ちのめされてしまったように両目を伏せ、憂いを醸し出す。こんなにシヨックを受けてしまっているお嬢さんに何も感じず手を出せるほど俺は良心を捨ててしまったわけではない。

身体を隠しきれない真っ赤な大翼が震えている。

——これを断れるやつがいるのかっ！

俺の大半を占めるまっぴんくの欲望を押しつけるくらいに、ほとんど残されていないはずの良心がどんどん膨れ上がっていく。

「し、仕方ないな……」

俺は情けなく、その場にうなだれながら了承の返事を出していた。

これじゃ、俺の望むだけの謝礼を求める前に、お嬢さんの一挙一動に振り回されてもらい損ねる予感がビシバシしている。しかし、すでに護衛を引き受けると答えてしまっている。道中のリスクを尋ねることもせずに。最初からもうダメダメな気がしてきた。

俺の心のうちの葛藤に全く気付いていないお嬢さん翼を広げて喜びを全身で表現している。ありがとうございます、なんて俺の手を取り飛び跳ねんばかりだ。だから、俺みたいな欲望の塊に捕まって喜ぶとは。のちのち後悔しても知らんぞ。しかしだ、こうやって俺はきつと毒気を抜かれつつ機を逃し続けるような気がする。おいおい、またもしばらく禁欲生活が続くんかい。

「わかったわかったから。飛び跳ねるのはやめておけ、せつかくのキレイな翼が傷ついてるぞ」

狭い洞窟内で広げるにはその翼は大きすぎるようである。天井を擦りながら、小石を降らせるその行為を止めに入る。状況を読め、と言ってもこのお嬢さんにそんな必要はなかったんだろう。きつと周囲がその前に危険を排除していき、限られた自由とも知らずはしゃ

いているお嬢さんの姿が目には浮かぶ。そしてこれから俺に降りかかるその苦勞も。――まだ知らぬ護衛ども、なぜこのお嬢さんから目を離れた。

「そ、そうですね」

なぜかもしもしとしたお嬢さんに首をかしげつつ本題へと移ることにする。まだ太陽は隠れてはいないが、だいぶ傾きつつある。腹も減ったが夜に、しかも土地勘のまったくない森の中を俺だけならまだしもこのお嬢さんを連れて歩くのはどう考えてみても得策ではない。ここはじっとするに限る。口笛でいまだ離れない子分を呼んだ。

「悪いな、肉を狩ってきてくれ。ウサギでも鳥でも……鳥はだめか？」

狼に食べ物の調達を頼みながらふと気づいて振り返った。

「どうした？」

これ以上ないくらいに俺から距離をとって壁に張り付いた姿が目映った。この姿を見て俺の本能がむくむくと顔を出してしまった。思わず舌なめずりをして、気付く。

「ああ、お嬢さん鳥だもんな」

自然界では捕食者と被捕食者である。俺の本能が、お嬢さんを鳥、すなわち獲物と認めたように、お嬢さんの中でこの狼を捕食者である敵であると感じたのだらう。ヒト型をとっている俺は本能を理性で抑え込むことができる。

「悪かったな、とりあえず肉を持ってきてくれ」

狼も目の前のお嬢さんを獲物と認めているが、人の姿をとっているともわかっているのである。俺の一言でさっさと外へ走り出た。

「で、俺は大丈夫なのか？」

12 (後書き)

名前！名前！とりあえず彼らに自己紹介をつつ！

「ええ、」

でも、先ほどの姿はちよつと身体が竦んでしまいました。先ほどの恐怖の名残が引きつった笑みを浮かべてお嬢さんは続けた。獣型はお嬢さんを必要以上に怖がらせてしまうらしい。しっかりと頭に書き留めていく。

「わかった、お嬢さんの前では獣型はとらない。ヒト型か……街に
いる間は中間型をとろう」

俺もヒト型をとっていれば、異形だからとお嬢さんだけが排除の対象となってしまう。それを避けるためにも俺も中間型をとっていればいらぬ争いを起こさずとも済む。その意がお嬢さんに伝わったかどうかはわからないが、それ以上その話題を続けることをせずに行こう、とお嬢さんを促す。

「どちらへ？」

「肉はあいつらに頼んだが、薬草や火を起こすための枝やは俺らが直接探したほうが良さそうだ」

ロウの木の失敗をこれ以上繰り返すのは御免だ。このお嬢さんは知らないかもしれないが、情けないことは隠すに限る。

久しぶりに陽光の下に出たお嬢さんは狭い洞窟内にいたせいで凝り固まった身体を、翼を大きく広げて伸びをした。

「本当に、大きな翼だ」

真っ赤な翼とは本当に珍しい。しかしこんな緑の森の中、赤の翼を隠す場所などない。これをとってもお嬢さんの血はきつと上位のものだったに違いない。身を隠すほどもない圧倒的な力を持っていたと考えられる。残念ながらお嬢さんのその力の片鱗さえも見当たらないが。

洞窟を視界でとらえることができる範囲内で、枝と食用の草を探す。何も知らないお嬢さんは俺の後について回るだけではあるが。鳥の

血を引いているだけあつてお嬢さんは目がとてもいい。それにこの大きな翼は完全に大型な鳥類である。肉食かもしれないが、人として育っているためかさほど本能は目覚めていないようである。

「お嬢さん、と言いつけてもいいが。名前くらい知っていてもいいだろ」

ある程度慣れてきたら俺のすることを見よう見真似でし始めた。離れてしまったため呼び止めようとして気付く。名前を知らない。護衛として雇われているため、あとでまとめて情報を得ようと考えていたが名前だけでも先に聞いておくのも悪くない。というか、名前なんぞ知らなくても護衛はできるけど。知っておけばいろいろ都合がいい。このお嬢さんに限って偽名などいわないだろうと思うが。小さな嘘でも見抜けるようにじつと目を見つめた。

13 (後書き)

名前は次に！

「タリアです、タリア・フォースと申します。それで貴方は……アルさんでよろしいですか？」

嘘を言っているようには見えなかった。しかし、名前を当てられたことによつて俺の警戒は最高レベルに引き上げられ、思わずお嬢さん——タリアより距離をとつて構えてしまった。

「なぜ知つてる」

チャキと柄に手をかけていつでも抜刀できるように。俺の愛刀は世間で使われているような剣とは異なり、細長く斬るために長けた片刃刀である。骨さえも断つことができるのは刀のおかげでもあり、俺の身体能力のおかげでもある。これをお嬢さんに向けるのはとても気が引ける。しかし、そうも言つてられない事情がある。

「そ、そんなに、驚かれるとは思いませんでした」

怯えを見せた表情に少し殺気を消す。しかし警戒ははまだ解かない。言え、と乱暴に告げる。

「ジルが、……私の護衛の一人なんですが。ジルがまっくらでふつさふさの獣耳と尻尾をもつた傭兵のことを知っていたので」

ジル？ どこにでもありそうな名前ではあるが、こんなお偉いさんの護衛になりそうな上品な知り合ひはいない。

「そのジルとやらは、なぜ俺を知っている」

噂とやらで俺を知つて話題に乗せたというのだろうか。それも腑に落ちない。身分差のあるこの世界で底辺にいるような俺をお嬢さんの耳に入れてどうしようというのだ。実力はある、うぬばねなどではない。答え次第では、と刀を持つ俺の手に汗がにじむ。

「お会いしたことはないようですけど、……もしものとき、と」

どうやら、最初からはぐれた時を想定していたらしい。常に最悪の事態を想定して行動するのは悪くはない、が。最悪の事態にならないように行動するのが望ましい。俺に護衛を依頼するようにならな

いるのであれば、俺の実力を知っているに違いない。さきほどの負け戦で死んでたらどうするつもりだ。きっとそうならないと踏んでいたのか。お嬢さんの無邪気なお願いにほだされてしまうことさえ想定済みであるなら未恐ろしい。

刀を鞘に納めて俺は殺気を解いた。ともあれ、このお嬢さんをどうこうするのは容易く、一度依頼を受けたからには最後まで完遂するつもりである。この依頼の終着点を決めるのはこのあとではあるが。

「わかった」

とりあえず、腹ごしらえをしてからだ。

すでに太陽は沈み、辺りは薄暗くなりつつある。恐怖を張り付けたままだったお嬢さんもいくばくか緊張をほどこいている。しかし鳥型である彼女はどうかやら鳥目であるらしく、すでにその目は俺を映すことが困難になりつつあるようである。

手を差し出して、戻るぞと告げた。

14（後書き）

とりあえず、名前は出ました。

タリア・フォーブスと、あとはご存じアルフォンス・マクベルでございます。傭兵ですし、便宜上アルと呼ばれております。

ためらわずに俺の手を取ったタリアはよっぽどそのジルという護衛を信頼しているのか、はたまたその頭は見目麗しいだけでなにも詰まっていないのか、わかりかねる。

木の根に躓かないように最低限の声掛けをして手を引く。途中寄り道をして飲み水を確保する。入れ物さえないため、その場で飲むように指示する。森を出るときはこの川を目安に歩くことにする。いつ休憩しても飲み水には困らない。

洞窟の前まで来たが、中に入ると完全に闇に包まれるため多少月明かりがあつたほうがタリアにはいいだろうと、手を放す。集めた木の枝を積み重ねて、指を鳴らして火を起こした。

「アルさんは、魔法を使えるんですか」

炎の明かりが徐々に大きくになるにつれて、タリアの瞳にも明るさが戻る。俺を認めて尋ねてきた。

「さんは知らない、アルで構わない。魔法……まあそうだな。簡単なものなら」

生きる上での必要なものは身に付けた。大がかりなものもできそうではあるが、俺は体術と剣術、つまりは超近距離戦が性にあっているため、覚えようと思わなかっただけで。

さきほど言い聞かせたせい、子分らはタリアの前に現れずに洞窟の前に獲物を置いていた。皮をはぎ、さばいて火にくべる。丸焼きではタリアの口に合わないかもしれないため、薬草でアクセントをつける。これで味は多少向上するが、やはりそこは野戦料理。顔に出さないように一生懸命になっているが、お嬢さまであるタリアにはお口に召さなかったらしい。しかしそれを口に出して文句を言うほど愚かではないらしい。俺がいなければこの森の中を一晚も生き

ていけないことぐらいわかっているようだ。

腹も満たし、十分な休養はとれたはずである。生粋のお嬢さまにはまだまだ物足りないかもしれない。依頼人はタリアかもしれないが、ここは俺のルールに則って進ませてもらう。

「さて、引き受けたからには話してもらおう。言いたくないことは言わなくともいいが、それを俺が知らないことによって引き起こされることに關して俺は責任を持ってない。もっと噛み砕いて言えば、もしそれでお嬢さんが危険にさらされようと俺はこの件から手を引く俺に護衛を頼みたいのであればそれ相応の対応を求める。まあ、ぐだぐだ言ったがジルとやらと俺に話すべきことを決めているんだろ？　まずはそれから聞こう」

面倒なことでありませんように、ととりあえず願った。

15 (後書き)

数話、堅い話が続きます……。頭空っぽにして読める話はもちろんのことあつで。

「本当にジルの言った通りですね、貴方はとても賢いと。それ以上に実力者であると言っていました」

ジルは手合わせを願ってました。もし無事にジルと会えた時にはぜひ叶えてあげてくださいませんか。これに対する俺の返事を聞かず、その事情とやらを話し始めた。

ぱちぱちと木が爆ぜる。焚火を挟んで座り、タリアの真っ白な肌は橙色に染まっていた。

辺境の地と言っても、グランドールと大陸の交通の要所であるカヴァルの戦は我が国だけでなくとも見逃せないものです。もしカヴァルがグランドールに落とされてしまえば、おそらく。

「世界情勢が変わりそうだな」

その通り、とばかりにタリアは深くうなずいた。交通の要所、と言われているカヴァルは国として小さくも大きくもないがその重要性は計り知れない。もしカヴァルがその重要性を政治の道具として使えば今の情勢はあり得ない。きっとカヴァルの世となっている。しかし、カヴァルの王は有能であり、どの国とも国交を持ち中立の立場を貫いている。しかし中立の立場を貫きたくともさほど大きな国土では大きな軍隊は持っていない。それを解消するために、この大陸で一番の国土を持ち国力をもつリスティアと懇意にしているのは公然の秘密である。カヴァルの王族にはリスティアの血が混じっているためである。中立とは建前、実際カヴァルが攻め込まれればリスティアが黙っていないだろう。そもそも、カヴァルが攻め込まれるような状況に追い込まれること自体ない、それほどカヴァルは侮れないのだ。

交通の要所ではあるため人は集まる。しかしそれはほとんどが商人である。それにともない護衛も増える。活気があふれる。何度か訪

れたことがあるカヴァルの街を思い返しても潤いある国だと思う。
今の世界情勢を思い返しているあいだもタリアの話は続く。

先の戦、グランドールはカヴァルを攻め込むと思われていましたが、
どうやら上層部もそこまでお粗末ではなかったようです。しかし、
カヴァルを囲むのはリスティアやグランドールを含めて8つの国で
す。そのうちグランドールの同盟国は2つ。この戦でグランドール
は大国側の小国を落とすでしょう。

「なんとなくわかった。お嬢さんは大国の人間か？」

つまりは、世界の動きを知ろうと歩いているということだろう。

俺の問いに首を振る。大国、つまりはリスティアの貴族ではないら
しい。—— おとぎ話の青年が創主である、この大陸最古の大国
である。

「大国側の人間とだけで。小国が落ちた今、おそらく我が国も対応
の対応をしなければなりません。もちろん、私が帰らねば準備がで
きないほど斥候がいらないわけではありませんけど、」

まだ裏がありそうではあるが、とりあえずジルと決めたであろう話
は終えたようだ。つまりはグランドールのなんらかの情報を持ち帰
りたいということか。

しかし、このお嬢さんが知る情報とやらはどこまで機密性高いのか
わからないため、対応もわからない。

じつと目をみつめたが、わからない。このへんは貴族のお嬢さまら
しく裏が読めそうにない。

16（後書き）

なんかわけわからなーいって思っても大丈夫です。タリアの話のあとにアルが噛み砕いて話しますから！

「わかった、じゃあ次は俺から質問だ」

どうぞ、とタリアは促す。すでに夜更け、獣さえも寝静まる時間に話のとりあらずの終着点が見えそうだ。火の勢いが弱まりそうであり、手元の枝を数本加えて混ぜこんで新しい空気を含ませた。

「聞きたいことは3つ。まずどこまでお嬢さんを連れて行けばいい。ああその道中の費用は後払いで払ってもらう予定だ、否は聞かない好きなだけ謝礼するとお嬢さん、あんたが言ったからな。次にさつきも言ったが道中追手がかかる可能性は？ 最後に、」

俺にとつては最初の2つが聞ければ十分、護衛を務められる。謝礼については最初に言質をとっているから。最初にお嬢さんを脅してアクシデントが起きれば護衛から手を引くと言ったが、不測の事態が起きようともどうとでも対処できる自信がある。たんまり謝礼をもらってとんずらする予定である。ジルとやらに捕まったら、と考えただけでも身震いする。本能がジルを拒否している。ジルを合流するようであればさつさとタリアを預けて、対価をもらってさよならだ。

聞きたいことの3つ目が俺にとつてもっとも切実で重要な問題である。真剣な顔して彼女を見つめているため、鳥目で見えづらいながらも俺の様子を察したらしい。

「ジルは知っていたはずだ。それでも俺にお嬢さんを託した、思ってもいいんだな？」

なんのことやら、と思ったはずだ。俺も頭の中が先走って、声に出してみればさっぱりわけのわからない発言になっている。

しかし、だ。もともと俺はそういうやつだと自覚している。頭の中は年中常夏の春真っ盛り。まっぴんくで、本能のまま生きている。良心に負けて受けた仕事だと言ってもやっぱりそこは切り離せない。

せっかくオイシイ思いのできそうな機会に指をくわえてお預けされるのはたまらない。それでも一応の確認をとる時点で良心に押され気味である。

まあ、痛いのも同意ない乱暴なのも俺は好きじゃないんで。どうせなら、お互い気持ちいいものがいいに決まっている。

なーんにも知らなそうな生粋のお嬢さんだし？ そりゃもう、世間の常識など知らないのだから好き勝手にさせてもらえそうじゃないか！ 内心踊りだしそうなくらい浮かれて、まだ見ぬ夜の一幕に鼻息荒く興奮している。

それに対するタリアは冷静そのもの、というよりやはり何のことやらわかっていないらしい。ここはごり押しで通すのみ。

「なんのことだかわからないのですけれど……？ そいうこと、なのかしら？」

ジルはどうやらタリアに言わなかったのか、……言えなかったのか知らぬが、ここにいるのは俺とタリアのみ。あれやこれやと言葉を並べ立てて同意を得ることなんぞ容易いことだった。

さよなら禁欲生活。

17（後書き）

よしっ！そろそろ話が動き始めれそうだ！

R15でかるーくげひんであります、いまさらながらにお詫びします。すいません。

阿呆なコはかわいくて仕方ありません。

タリアはのほほんお嬢さまで、熱意が明後日の方向に向かってる
のでまたもかわいくて仕方ありません。

すがすがしいともいえる朝日をこの身に浴びながら、久しぶりのサバイバル生活を思い出した。昨夜はあれやこれやと言葉巧みにタリアから了承の返事をもらいながらもコトに及ばなかったのはわけがある。

生粋のお嬢さまであるタリアは国のため、と言って動き回れるくらいには積極的に貴族のお嬢さまの基準を多少外れているものの、さすがに森の中を動き回るのは体がついていけなかったらしい。文句もなにも言わずに俺の後を付いてきていたから俺は勘違いしていた話の途中で、うとうとし始めたタリアは最初は隠そうと最初は必至になっていた。しかし一瞬でも意識を飛ばして横にぐらりと傾いた時は、さすがのタリアも観念したらしい。すみません、と可愛らしく断りを入れたので俺もしょうがないと思ったのだ。

——つまりはこの森を抜けるまではコトに至れそうにないな。

「タリア、起きろそろそろ行こう」

大きな翼で体を守るようにまるまるタリアをゆすつて起こす。寝ぼけ眼で俺を見上げるのが可愛かったから、ついつい手が出てしまったのはご愛嬌。

「……びつくりしました」

隙間のなくなった俺たちの間。離れた直後に数度瞬きをしてタリアは言った。俺は笑って誤魔化す。

——美味しそうなものを目の前にして手を出さないとは、ソレに対して失礼だな。

「朝の挨拶つてとこさ」

すでに火種は見当たらないが、これが原因で山火事でもなったら後味が悪い。小さく手を振り、何もなかったところから水が飛び出す。最後の消火を終えて、目を上げれば尊敬のまなざしとぶつかり俺は思

わず一步後ずさる。こつ恥ずかしいことを言われちゃたまらないと、いまにも何か言いたそうなタリアの口を掌で抑えた。掌に吐息が当たる、吐息だけでなく先ほど指先で味わったばかりの柔らかな唇も当たって、失敗したと思った。

——同意もなくするのは俺の主義に反するつてのに。

いや、昨夜やつぱり同意を得てるか？　しかしこんな真昼間から森の中でコトに挑んだらそれこそ猥褻みていて、俺の主義に反する。ヒト型として交わるならそこは気になるところではある。

大きくため息をついて、いまだ抑えたままの掌を外して、タリアを起こすように促した。

「匂いが風にのってやってきた。シルフにも聞いたが早ければ今夜、街へ着きそうだ。……まあタリアの足じゃあ明日の昼間つてところかな。追手は掛からないというタリアの言葉を信じるならば、急いで怪我でもしちゃたまらない。街道に出るまではタリアのペースで行くか」

しかしまあ、敵対する軍服をきた男女がいきなり街に現れるのもまづい、しかしいまから目指す街がどちらの領地であるかわからない以上、簡単に服を捨てることもできない。願わくば小国の領地でありますように。

18 (後書き)

ちよつと間隔が空くと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4309v/>

アルフォンス・マクベルの受難

2011年10月9日14時18分発行